サンダリル興国史

大九

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
サンダリル興国史

【Ｎコード】
Ｎ５８１６Ｚ

【作者名】
大九

【あらすじ】
サンダール王国の王子マルクが様々な困難の末、サンダリル皇国を打ち立てる話です。現在、第１章ムンズ攻略編を執筆中。

プロローグ～旅立ち～（前書き）

２０１２年１月６日、プロローグを差し替えました。これが０章になります。ムンズ攻略編１話２話は差し替える予定はありません。次は３話を投稿します。

プロローグ～旅立ち～

「ふざけるな！！」
「いや、だからね、ハンムリルはいい所だし、学問も栄えているし、食べ物もおいしいし、何より芙雪ちゃんもいるじゃないか！婚約者同士もっと仲良くなってもいいんだと私は思うんだよ！」
「それが、一番嫌なんじゃないか。誰が好き好んで芙雪のいるところに行かなくちゃいけないんだよ！ってか、婚約解消してくれよ。」
「またまた～。そんなにラブラブなとこ、見せつけなくてもいいんだよ。」
「誰がラブラブだ！？」
朝から続く親子喧嘩は昼過ぎになった今も続いている。この喧嘩が始まった時こそ、大勢の人が心配し止めようとしていたが　この位長くなると、もはや誰も見ている者はいない。ここは、サンダール王国の首都サンダ。そこの中心にあるサンダール宮殿の謁見の間である。早朝より、呼び出されたマルクはこの寅の月に上級教育院を卒業する。その後は、サンダール陸軍士官学校に進学する予定であった。既に、先月行われた入学試験では、王子という身分を抜きにして素晴らしい成績で合格していた。
「とにかく、留学は確定なの。陸軍士官学校の合格も取り消しておいたからなんの心配もなく行ってきなさい。あっ、それと向こうでは芙雪ちゃんと一緒に住むことになるからね。」
「本当に勘弁してくれよ。この際、留学でもなんでもしてやる。でも、お願いだからハンムリルだけはやめてくれ。芙雪の所にだけは行きたくねぇ。」

そんなやりとりをしているころハンムリル王国の王城では、
「お父様、マルクが我がハンムリルに留学に来るって本当ですの？

しかも、私と同じ大教院に通うって？」
「ああ、本当だとも芙雪よ。婚約者殿と一緒に通えてうれしいだろう。」
「ええ、とっても！ってそんなことありませんわ。べ、別に私はマルクの事なんてなんにも思っていませんわ。婚約にしたって本当はもっと格好良くって、爽やかな殿方とが良かったのに。」
「では、婚約を解消するか」
「え？あっ、ちょっ、ちょっと待って下さい。確かに、マルクは私には不似合いですけど、もしこの婚約を破棄してしまったら、マルクは一生独身になってしまいます。そんなことになっては、私も少し心が咎めますからそのままにしてもいいですわ。ええ、もう本当にしょうがなくですわ。」
（はぁ～。我が娘ながらどうしてここまでひねてしまったのだろう）心の中でため息をつく王であったが顔には出さない。
「マルク君には、今造らせているお前の別邸で一緒に暮らすことになるからそのつもりでな。もう、下がってよいぞ。」
娘が出て行くと横に控えている宰相に言った。
「例の計画は進んでいるな？最大の懸案であった芙雪とマルク君の相性は問題無さそうだしの。」
「万事、つつがなく進んでおります。しかし良いのですか？姫様に本当の事をお伝えしなくても。」
「あれには、まだ早い。恐らく向こうもまだ話してはいないであろう。」
「帝国の動きも気になりますし。」
「帝国もまだしばらくは動かんだろう。１７年前の様なことにはならんはずだ。それに次に手を出すならサンダール王国のはずだしな。」
「それで、マルク様を我が国へ。」
「そうだ。一時しのぎにしかならんがの。とにかくどちらにせよまだ数年の猶予がある。その間にあの２人の仲を強固なものにするぞ。

」
「御意」

「沙織、沙織！どうしましょう。マルクがこっちに来るって！しっ、しかも一緒に暮らして、一緒に大教院に通うなんて。あ～～ー～、私、私、どうしたらいいのでしょう？」
きゅ～っとかわいい音を立てて芙雪が目を回す。
「ちょっと姫様！落ち着いて下さい。」
結局、芙雪が目を覚ましたのは、数分後のことであった。長年侍女として芙雪に仕えている沙織にとって、芙雪がどれだけマルクのことを想っているのか。そして、それを表に出せていないか。ということをよく理解していた。芙雪も沙織の前であれば自然な自分をさらけ出せるのである。
「マルク様がこちらに来られるのであれば、頑張らなくてはなりませんね。今度こそ、間違っても暴力なんてふるってはいけませんよ。」
「わっ、解っているわよ。それに少しくらいの照れ隠しくらい笑って受けるのが男の甲斐性ってものだわ。」
「姫様の場合は少しばかりではすまないのでは？例えばあれは3年前であったでしょうか？姫様がサンダに行かれたとき、…」
「わぁ～わあぁあ～。それはなし！！忘れて！」
「ふふふ、あんなかわいい姫様を忘れるなんてできません。とにかくマルク様がいらっしゃるまで素直になる特訓ですね！」
「まさか、あの特訓？」
「ええ、そのまさかです。私の大事な大事な姫様が婚約者に嫌われてしまうなんてあってはいけませんからね。さあ！行きますよ、姫様！」
「い～や～」

「じゃあ、向こうに行ってもしっかり勉強してくるんだよ。芙雪ちゃんとも仲良くな！」
「行くとなったら行くけど、３日で退学になってやる。」
「たかだか、４年間ではないか。それくらい辛抱してこい。あっ、そうそう。帰ってくる頃には孫の顔が見たいな。」
「だ・れ・が・子作りなんかするか。んなこと芙雪にしたら、余計婚約破棄できないだろ。とにかく、もう時間だからな。俺が帰ってくるまでは国潰すなよ。」
「ははは、国王に向かって言う言葉じゃないな。まぁ、行ってこい！」

「行ってしまわれましたな。マルク様にはこれからの４年間が生涯で最後の平穏な日々となるかもしれませんな。しかし、別れの言葉が国を潰すなとは、さすがはマルク様ですな。素晴らしい勘をお持ちでいらっしゃる。」
「ははは、あいつの最後の願いは叶えられないだろうがな。ガルン、マルクがハンムリルに着き次第、影を接触させよ。マルクには今のうちに今後の世界のことを叩き込ませろ。」
「御意。既に手配は済んでおります。」
「儂はもう思い残すことはない。さあ、このサンダール王国に最期の花火を打ち上げるぞ。」
「最期までお供いたしますぞ、陛下。」
「王宮に戻るぞ。」
「陛下、もう少し見送ってもバチは当たりますまい。これがマルク様との今生の別れとなるならなおさら。」
しかし、そんな宰相ガルンを無視して王は毅然として歩いていった。サンダール王国はこれから４年の後、世界の地図から消え、マルクは父との今生の別れとなることをまだ知る由もなかった。

ムンズ攻略編第1話～放課後～（前書き）

プロットも何も考えず投稿してしまった。今更後悔中！何とか最後まで書ききればと思っているのになぜ第1章？

二章に入れようと思ってた話を間違って入れてしまったので内容が色々変わってます。ごめんなさい。多分これからも度々有りそう。。。

ムンズ攻略編第1話～放課後～

「まっ待て、話せばわかる。」
「そう言っていつも言い訳ばかりなのはマルクじゃない！何をどうしたら授業をサボってよくなるのよ！今日休んだら単位がなくなるって言われてるんじゃない。」
「だから、授業休んだのは悪かったって」
　ここハンムリル王立大教院では3年半前から続く口論である。いや、口論と云うよりは、少女が少年を糾弾しているというところであろう。何しろ3日と開けずこの糾弾が起こるので周りにいる学生たちは最早、日常茶飯事となっている。ちなみに糾弾されている少年は、隣のサンダール王国の王太子マルク・アレ・サンダール。3年半前に父王ダイオスの命によりハンムリル王立大教院に留学している。現在18歳。少女は芙雪・シグナール・ハンムリル。このハンムリル王国の第一王女である。ちなみにマルクと同い年である。
「だから、道に迷子がいてだな。その子の親を探していたら遅れちゃったんだって」
「それは25日前の言い訳でしょうが！どうして、そう毎月のように迷子に出会うのよ」
　しっかりマルクが前回ついた同じ嘘のことを覚えている芙雪であった。
「あの、姫様。周りの方も見ておられますし、もう少し落ち着かれて下さいませ。」
「うるさいわね、沙織！今日という今日は絶対にゆるさないんだから」
「まぁまぁ、沙織ちゃん。なんとかは犬も食わないって言うし。いつものことなんだからほっとけばいいんだよ。どうせ、またマルク王子が謝って丸く落ち着くんだから」
　マルクに食ってかかる芙雪をなだめようとした侍女の沙織。そし

て、傍観を決め込んでいるのは、マルクと一緒に留学にきているユキトである。この４人が普段一緒にいるグループということになっている。

「ユ～キ～ト～。なんとかって何よ。私とマルクは婚約者というだけで別にまだ夫婦じゃないんだからね。それに私は真面目で誠実な人が好きなの。間違っても授業サボっているような不良なんかとは結婚しないんだから。お父様にいて婚約破棄よ。……そりゃ～、昔はいつも優しくしてくれたり、頼り甲斐もあったけど。最近なんて、…。せめて、愛の一言でもささやいてくれればわたしだって……。って何言っているのよ、私。今のはなし！なんでもないんだから！」

いつものことながら、芙雪の自爆に沙織とユキトは温かい目をしていて、マルクは顔を赤くしてそっぽを向いていた。

「ようやく一息ついたとこでいつものとこに行くか、マルクもそれでいいよな？」

「ああ、それじゃ行くか。」

堅苦しいのが嫌いなマルクは、ユキトには自分のことをマルクと呼び捨てにさせていた。

彼らの溜まり場とは、大教院から徒歩３０分は歩かないと着かないなんの変哲もない喫茶店である。昔、無理やりハンムリルに留学させられてふてくされていたマルクが食い逃げでもしようとたまたま入った店である。ちなみにその時は、マスターであるヨシトに一捻りにされた挙句、一国の王子というものがどういうものであるかということを延々と講義された。奇しくも、サンダール陸軍士官学校に進学しようと思っていたマルクにとってただの喫茶店のマスターに負けたことが悔しく、マスターに再戦しようと喫茶店に通いつめたことがきっかけである。結局、３年半経った今もマルクはヨシトに一度も勝てたことがいない。加えて云うなら、このマスターのお陰でマルクはそれなりに大教院に通うようになった。大教院でのマルクは生活態度以外、つまり学力、体力の他、魔力、霊力などすべてにおいて優秀であった。しつこいようであるが、生活態度のせ

いで今は単位の危機であるが・・・。
「マスター、今日も着たぜー！早速勝負しよう！」
「ちょっと、マルク、待ってよ。あっ、マスター、こんにちは！」
「こんにちは、マスター。今日もお邪魔します。お手伝いすることはありますか？」
「マルクも姫様もはしゃぐなって、マスター、お騒がせします。」
４人が異口同音にマスターに挨拶すると、店の奥からひょろっとした男が出てきた。
「はいはい、いらっしゃい。どうせ、マルクが待ち切れないからちょっと行ってくるから少しお店をお願いね、沙織ちゃん」
「はい、かしこまりました、マスター」
すでに喫茶店の裏庭にで待っているマルクを見ながら言うマスターに沙織が答える。

裏庭にはすでに準備を済ませたマルクと審判席に座る芙雪が待っていた。ユキトは店にいる。
ヨシトの準備が終わり、２人が向き合う。芙雪がコインを投げ、地に落ちた瞬間マルクの魔力が爆発した。
「ファイヤー・ストーム！！」
いきなりの強力魔法がヨシトの中心で渦巻く。ファイヤー・ストームは炎系と風系の魔法を合成した上位魔法である。軍の魔法兵において大佐昇進課題の一つに挙げられているものである。間違っても一喫茶店マスターに対して発する魔法ではない。やがて炎が焼き尽くした後を見ると消し炭一つ残っていない。しかし、マルクは緊張を解かなかった。
「いや～。びっくりした。そんな強力魔法出さないでよ。僕を殺す気？」
突然背後からの気配にマルクは迷うことなく前に飛び込んだ。直前までマルクのいた所にヨシトの裏拳が炸裂する。
「あんたは、そんなもんで死なないだろうが！」

振り向きざまに繰り出した蹴りは空を切る。
「う～ん、じゃこういうのは？フリーズ・アタック！」
マルクに向かって、数多の氷の粒が飛来する。マルクはとっさにファイヤー・ウォールと唱え、氷の粒を溶かす。しかし、溶け切らない粒がマルクに当たる。
「ぐっ」
「ほらほら、足が止まっているよ！」
軽い発言をしながら、ヨシトが間合いを詰めてくる。そして、ヨシトの圧倒的な体術に対し、受け切らなくなったマルクはとうとう痛烈なアッパーをもらう。
「フゥ。また、僕の勝ちだね。でも昔に比べると大分いい動きをするようになったんじゃないかな？」
そんなことを言いながら、ヨシトは店へと戻っていく。代わりに、マルクのもとには芙雪が近寄ってくる。
「大丈夫？マルク？」
治癒魔法をかけながら心配する芙雪にマルクは言う。
「あぁ、大丈夫だ。ありがとな、芙雪」
いつもは何かと喧嘩が多い2人であるが、感謝するとき、マルクはしっかりと礼が言える。
「べっ、別にあんたのためではないんだからね」
お決まりのセリフを言う芙雪に対しすっかり回復したマルクは楽しそうに笑う。
「マルク～、姫様～、お茶が冷めるぞ～。」
中からユキトの声がし、喫茶店の中に入っていく。そして閉店時間まで雑談をしていくのであった。

ムンズ攻略編第1話～放課後～（後書き）

あれ、芙雪はツンデレにするつもりはなかったのにな（？）
一話の長さの適性がわからないのと、文才のなさに焦っています。
修正の結果、内容が変わってしまいました（汗）修正前の作品を読んでくださった皆様、申し訳ありません。

ムンズ攻略編第2話～出陣命令～（前書き）

なんとか3話出せました。また、頑張ります。お気づきの点ありましたら、ご教授願います。

ムンズ攻略編第2話～出陣命令～

「では、マスター。次は必ず勝つからな！」
閉店時間にナリ、４人は喫茶店を出ていった。
「しかし、いつになってもマスターには勝てないわね、マルク！」
芙雪はニヤニヤとしてマルクをからかう。マルクはむっとして、
「マスターが強すぎるんだよ。３年半前だって俺は別にそこまで弱かったわけじゃない。少なくとも、体術も魔術も陸軍学校の新入生レベルではトップクラスだったはずだし。間違っても喫茶店のマスターなんかに負けるはずはなかったんだ！」
２人がキャイキャイと言い争いをしていると、ユキトが言った。
「しかし、マスターは何者なんでしょうね。常識から言って、我がサンダール陸軍でも中佐レベルの実力を持つマルクがガチでやって手も足も出ないんだからな。少し、過去を探ってみたが６年前に喫茶店を開いたこと以前のことが全くわからなかった。」
ユキトがそんなことを調べていたことに３人が驚く。
「それより、マルク。あんたどうすんのよ。本当に単位が出なくなっちゃうわよ。」
昼間の件を思い出し、心配そうにマルクを見る芙雪。彼女にとって今の一番の問題はそのことである。
「まぁ、出席以外は完璧だし、なんとかなるだろう。それにマジでやばくなったら親父さんが何とかしてくれるよ。」
「私の親を頼るな！」
マルクと芙雪が婚約者同士ということもあり、マルクは芙雪の父親、つまりハンムリル国王を親父さんと呼ぶ。国王自身もマルクを自分の息子のようにかわいがった。

４人は、学校の近くの屋敷に帰ってきた。ここは芙雪の別邸である。芙雪が学校に通うにあたり、国王が作らせた。曰く、実家から

でなくては安心して夜遊びもできないであろう、とのこと。４人は現在そこに住んでいる。持ち主である芙雪と侍女である沙織はもちろんとして、婚約者なら別に問題ないとのたまう国王により、マルクとユキトの下宿先もそこになった。（ちなみに、最初マルクと芙雪の部屋まで一緒であったが、それはマルクが全力を持って辞退した。）普段の４人は屋敷に帰るとそれぞれ、部屋にこもってしまう。夕食はヨシトの所で済ませてきてしまうし、風呂やトイレといったものは各部屋に備え付けられている。沙織も屋敷にはメイドがいることから芙雪の世話をする必要はない。もっとも、こちらは芙雪の話し相手として夜遅くまで芙雪の部屋にいることになるのだが…。しかし、この日はそのいつものがなかった。

４人が屋敷につくと門のところに一台の車が止まっていた。

「あれ？ダレル公の車じゃない？」

ダレル公とは、現在宰相として国政を行なっている。同時に宮廷魔術団の団長でもある。国王と同日に生まれ、互いに切磋琢磨しながら青年時代を過ごした２人には強い信頼関係があった。日頃の忙しさなら国王以上であり、“ハンムリルの守護神”の異名は、国内に留まらず、世界に知られていた。特に、２０年前にあった半虎戦争では、ハンムリル軍魔術将軍として伝説になるような戦功を挙げた。現在は、気分屋の国王に対し、ただひとり諫言を言える存在となっている。

屋敷に入ると予想通りダレル公が待っていた。

「急に来てしまい、申し訳ありません。姫様。マルク様。それにしても随分と帰りが遅いようですな。こんな時間まで大教院で勉強とは、いやはや、このダレル感服でございます。」

いつも、郊外の喫茶店に入り浸っていることなどお見透しのくせにサラリと小言を言ってのけるダレルはさすが一国の宰相である。

「今日、こちらに伺わせていただいたのは他でもない。マルク様の件でございます。」

すでに、大教院でのサボりの連発で単位が危なくなっていることを知られているようである。去年までは、芙雪がなんとか教師たちに話をつけてきたが今年はとうとう国王まで話がいってしまったようである。

「マルク様の授業態度に対し、陛下は大爆笑で単位くらいくれれば良かろう。とおっしゃったのですが、やはり他の生徒への示しがつかないということから、私から１つ課題を出させていただくことになりました。」

そう言って、１つの封筒を取り出した。

「拝見させて頂きます。」

マルクが神妙に封筒を開ける。

課題書

ハンムリル王立大教院　練兵学部兵略学科４年　マルク・アレ・サンダール

上の者、授業態度がすこぶる不良である。よって、下記の通り補修課題を課すこととなった。

課題　現在、我が国の西方にあるムンズ地方において、反ハンムリル組織が挙兵した。騎馬兵１００、歩兵３００、魔法兵５０をつれて制圧すること。

ハンムリル王立大教院　院長　ダレン・カイルス

「ちなみに、軍を動かすために陛下から特別に階級を与えられたぞ。」

さも当然とばかりにダレルが続ける。

任命証

マルク・アレ・サンダール

上の者、ハンムリル軍特務中佐に任ずる。

ハンムリル国王　忠真（ただざね）・エクス・ハンムリル

「ちょっと、これどういうことよ！」
あまりにも突拍子のないことに芙雪が声を上げる。
「あっ、そうそう、制圧中は特例として大教院の授業に出なくても出席扱いにしておくので安心してくだされ。」
そう言うと、ダレルはすたすたと、門を出て帰ってしまった。
「あ～、もう！こんなの無理に決まってるじゃない。明日、お父様に文句言いに行ってやる。」
課題書と任命証を見つめて立ち尽くしているマルクを横目に芙雪はすたすたと自室にこもってしまった。その後ろを慌てて沙織が追いかける。そう、激情していた芙雪は気付かなかった。２枚の書類を見るマルクの口がニヤリと笑っていたことに。

マルクは夜、自室で本を読んでいた。その背後にすっと影が現れる。
「マルク様、失礼致します。」
「よい、して結果は」
「まず、祖国サンダールについてでございますが、ダイオス陛下は相変わらずのようでございます。」
「まぁ、父上はちょっとやそっとじゃ動じないからな。」
「しかし、弟君のエリオ殿下は最近、軍の上層部や魔術師たちとしきりに接触しているようです。また、コルン帝国とも密かにコンタクトをとっております。」
「ここで、バレている時点で、密かにっていうのは意味が無いがな。まぁ、よい。そちらは今しばらく静観でよいであろう。それより、ムンズの方はどうだ。これもサンダリル計画のうちなのであろう。」
「おそらく、そのようでございます。ムンズの反対組織は現在１００００ほどの規模でございます。制圧にはそれほど苦労しないかと」
「反旗を翻した理由はなんだ。」
「地元貴族の横行でございます。ムンズ伯爵は不当に税を上げ私服

を肥やしておりました。」
「では、方法次第で我らの味方になる可能性は」
「高いと存じます」
「よし分かった。ご苦労だったな。引き続き、各方面をよろしく頼む。あと、しばらく、遠征になると思うのでそちらもしっかりとな。」
「かしこまってございます」
すっと影が消えた。部屋には再び、静寂が訪れ、マルクがページを捲る音のみが響く。

ムンズ攻略編第2話～出陣命令～（後書き）

ようやく第1章ムンズ編が始まります

ムンズ攻略編第3話～出陣～（前書き）

プロローグを加筆修正しました。そちらから是非読んで欲しいです。
3話は相変わらず、芙雪のツンデレっぷりがうざいです（笑）

ムンズ攻略編第3話～出陣～

「お父様、どういうことですか？マルクが討伐軍の指揮など無理です。」
「しかしな、こうするしか方法はないし、別に後ろで指揮の真似事をするだけだ。実際は副官がしっかりとやる。強いて言うなら御輿みたいなもんだよ。」
「ならば、私も一緒に行きます。」
「ならん！芙雪に何かあったらどうするんじゃ！」
「言っていることが矛盾していますお父様」
翌日、芙雪はマルクを引きずり、父であるハンムリル国王に直談判に来ていた。そして、ずっとこのような押し問答の繰り返しである。
「だいたい、マルクだって無理だと思ってるわよね？」
「へっ？」
急に話を振られたマルクは思わず間抜けな返事を返してしまった。
「はぁ～。いい？どうして私がこんなに頑張っていると思っているのよ。全て、あなたが戦に行かなくてすめためじゃないの！私、ひとりがバカみたいじゃない！」
いつまでも怒り続ける芙雪であった。
「芙雪の言いたいことはわかった。愛しの愛しのマルクに危ない目には合わせたくないってことだな。しかし肝心のマルクがどう思っているか儂は聴いておらん。」
「そんなの、聴かなくっても解りきったことじゃない。行きたくないに決まってるわ。それに愛しの愛しのって何よ。私はただ、お父様が勝手に決めた婚約者でも一応は婚約者だし、いくら形だけでもころっと死なれたら後味悪いっていうか、えぇっと。と・に・か・く、マルクだって行きたくないの！！」
「い、いや、おれは…」
「なに？」（ジロリ）

「いえ、なんでもありません。」
芙雪の睨みに震えるマルクは再び口を瞑る。
「これこれ、芙雪。そう威嚇していてはマルクが何も言えなくなってしまうではないか。妻とは夫を立てるものであって威嚇するものではない。マルクも少しは物事をはっきりと言わないと。その歳で尻に敷かれていたらこの先やっていけないぞ。」
「まだ、結婚してないんだから妻じゃない！へっ、変なこと言わないでよ。マルクもなに照れてるのよ。」
「まだ、のう。しかし、大教院の者からいつも言われるぞ。二人のイチャイチャだけはどうにもならないって。親として、育て方を間違えたのかのう？」
「知らないわよ。有ること無いこと言わないでくれます？」
「いや、別にあることしか言っとらんが・・・」
「とにかく、マルクの出陣の件は撤回しておいてください。別の課題を作っておいてください。いいですね？へ・い・か！」
「おおぅ。マルク君。芙雪が他人行儀な呼び方をするぅ。」
「いえ、わたしに言われても・・・」
「では、もう下がりますから。行きましょ、マルク！！」
「あぁぁ、ちょっと。引っ張らないでぇぇぇ～。」
芙雪に引きずられるマルクを見ながらダレル公がボヤく。
「また随分と偏愛されておりますな、芙雪様は。」
「親としては、複雑なんだがな。しかし、今回のムンズ攻略はなんとしてもマルクに行ってもらわないといかん。ダレル、どうするかのう。」
「おそらく、サンダール王国はあと半年でしょう。それまで何としてもムンズをマルク様の地盤にしていただかなくてはなりません。」
「何とかしないとな。とにかく、明日マルクにもう一度話をして明後日には出発してもらう。芙雪はしばらく話をしてもらえなくなるかもしれないが仕方ないな。」

「まったく、お父様は何を考えているんでしょう。マルク、心配しなくてもいいわ。私がしっかりと話をつけるから。絶対、出陣なんてさせないんだからね。」
「しかし、それで単位をくれるなら楽じゃないか。」
「ばか！！そんなので命賭けるとか意味解らない。」
「でもまぁ。決まってしまったんだから。芙雪もあんまりお父さん困らせちゃいけないよ。」
「でも、それで死んじゃったらどうするのよ。」
「だから、俺は今回、司令官としていくから自分が実際に戦闘することはないし。副司令官がすごい優秀らしいから指揮を採るのもそっちだろう。」
「私が言いたいのは・・・ぅぅぅ～。あと半年でマルクは国に帰るのよ。少しでも一緒にいたいじゃない。・・・って、別に深い意味はないのよ。ただ、マルクはいつもだらしないし私がいないとしっかりとした王子としての勤めが果たせないからであってその・・・。・・・もういい！！マルクなんて戦場に行ってしまえばいいんだわ。でも早く帰ってくるのよ。ああ、もう。私は何を言いたいのよ～。」
翌日、まだ愚図りながらも芙雪はマルクの出陣を承諾した。そして、

「それでは、無事ムンズの内乱を平定してまいります。」
「うむ、分かっているとは思うが、此度の戦はそなたの一生が左右されるものとなる。細かい事はこれにしたためておいたのでよく読んでおくように。それでは、武運を祈っておるぞ、マルク。それとデイヘラー少佐、マルク特務中佐の補佐を任せる。」
「はっ、マルク殿下を補佐し内乱を速やかに沈めてまいります。」
「マルク、早く帰ってくるのよ。べっ、別にあなたがいないと寂しいとかそういうのじゃなくて、えっと、そう！私はこの歳で婚約者に死なれるなんて汚点をつけたくないからなのよ。いいから、サッサと行ってきなさい。待っててあげるから！」
「ははははっ、それじゃ行ってくるよ。全軍、出陣！」

「マルク様、行ってしまわれましたね。大丈夫でしょうか、姫様。」
「沙織、いくらあなたでも、マルクを侮辱する事は許さないわよ。マルクはもともと戦闘能力はそこそこあるし、今回は私の婚約者として御輿役だから戦闘はでないって言ってたわ。」
「そうですよ、沙織。マルクはああ見えても自分の身くらい自分で守れます。」
「ユキト？あなたは行かなかったの？」
「ええ、私には帰国命令が出ました。この時期になぜ？と思うのですが命令なので戻ります。しばしの別れとなり申し訳ありません。」
「そう、ユキトも居なくなってしまうなんて、なんかサンダールの痕跡をすべて無くしてしまおうとしているみたい。」
「そんなこと無いですよ。ただ、ちょっと寂しいですね。私も午後には出発します。それでは」
「沙織、あなたはいつまでも私のそばにいるのよ。」
「姫様、何を言ってるんですか。たとえ、マルク様に捨てられても、私は絶対離れませんからね。」
ずっと4人で過ごしてきた芙雪にとって2人との別れは少しこたえるものがあった。
一方、ムンズに向けて出発したマルク率いるハンムリル王国軍は、一路ムンズに向かっていた。馬上で並んでいるマルクにデイヘラー少佐が尋ねた。
「司令官殿、陛下からはなんと？」
「ああ、その事も含めて今夜、野営地で話す。ただ、これだけは言わせてもらう。少佐には相当な貧乏くじを引いてもらってしまった。しかし、このことは少佐にしかできないという陛下の信頼からである。そのためにハンムリル王国に対して反逆者と罵られるようなことがあっても耐えられるか？」
「それはすべて陛下の意志ですか？」
「そうだ」

「わかりました。ではこの命マルク様に預けることにします。」
「すまないな」
その後、二人は野営地まで一言も話さず進んだが、どちらからも確固たる意志を持った顔が伺えた。

ムンズ攻略編第3話～出陣～（後書き）

しばらく本業があるので、次話投稿が遅くなりそうです。なるべく、今月中に出したいです。活動報告は定期的に更新するので、そちらでご確認ください。

まだ、手探りで書いているので、いろいろアドバイスなどが欲しいです。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n5816z/

サンダリル興国史

2012年1月6日22時46分発行